

放送日： 平成 20 年 10 月 5 日

タイトル： お産は命がけ

担当者： 医師 小林 昌

公立甲賀病院産婦人科の小林です。

今日は、産婦人科、ということで、お産は命がけ、というお話をさせていただきます。

皆さんの周りで、最近お産でお母さんがなくなったという話は、あまり聞いたことがないと思います。また、赤ちゃんがなくなったという話も聞いたことがないかもしれません。

しかし、約 50 年前の 1960 年ごろ、お産のときに、50 人に 1 人の赤ちゃんが出産前後で亡くなり、さらに 1000 人に一人はお母さんが亡くなっていた、と聞くと、ほんの少し前まで、お産はまさに命がけであり、また赤ちゃんが死産になってしまうことは、良くあることであったことがわかります。

では、現在はどうなっているかということ、最近では年間約 100 万のお産があるのですが、そのうち、赤ちゃんは年間約 5000 人、お母さんで約 50 人の方が、毎年亡くなっています。

割合で言うと、200 人に一人の赤ちゃんと 2 万人に一人のお母さんが命を落としているということです。こう聞くと、まだまだとても多い気がしますね。

こんな話を聞いてしまうと、皆さんは怖くなって子供なんか生みたくなくなるかもしれません。また、日本だけでなく、より安全な気がする海外でお産をしようかなんて考える人もいるかもしれません。

では、どうしたらいいのでしょうか。これに対する答えですが、とくに変わったことをする必要はないのです。なぜかということ、

実は、日本の新生児死亡率（いわゆる赤ちゃんの死亡率）は、世界一低いのです。これは約 10 年前からずっと世界一です。また、妊産婦死亡率といわれるお母さんの死亡率は、世界一ではありませんが、これもアメリカやフランスなどよりも低く、先進国の中でもトップクラスなんです。

ということは、今、世界で一番安全にお産をしたいと思う人はどうしたらいいかということ、答えは意外と簡単です。別に海外に行く必要はありません。

まず、妊娠かな、と思ったら、早めに産婦人科にかかること、そして、妊娠がわかったら、妊婦検診を、医師の指示通り、きちんと受けてくだされば、それで世界のトップクラスの周産期医療が受けられます。

最後に、皆さんにお願いしたいことは、はじめに、世界でトップクラスの周産期医療の国に住んでいるんだ、という自覚を持っていただくこと。さらに、それでもお産は命がけなんだ、ということを忘れないで下さい。そしてめでたく妊娠されましたら、妊婦検診は必ず定期的に受けましょう、ということですね。以上、産婦人科医からのお願いでした。